

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：53901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00678

研究課題名（和文）「動詞+前置詞」から成る句動詞の成立過程に関する基礎的研究及び新分類法の提示

研究課題名（英文）The Study of the Development of Phrasal Verbs Consisting of "Verb + Preposition" and Introduction of New Classification Method

研究代表者

神谷 昌明 (KAMIYA, Masaaki)

豊田工業高等専門学校・一般学科・教授

研究者番号：40194980

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「動詞+副詞辞」から成る句動詞の発達過程とは異なる「動詞+前置詞」から成る句動詞（例：run into 偶然出会う）をthe Oxford PHRASAL VERBS Dictionary for learners of English 2006からすべて抽出した。そして前置詞の発達過程及びフランス語法の翻訳借用（なぞり）を加味しながら、OED等の史的コーパスを用いて、「動詞+前置詞」から成る句動詞の起源及び発達過程を明らかにした。そして各種句動詞の分類を発達過程から再構築し、動詞の語源（ゲルマン語源動詞、フランス語源動詞）及び音節数に基づく新分類法を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外を問わず、句動詞研究は共時的なレベルでの研究が大多数であり、歴史的に句動詞を分類した先行研究や成立過程のメカニズムに焦点を合わせた研究は、Hiltunen, R. (1983)以降はあまり活発に行われていない。「動詞+副詞辞」から成る句動詞と「動詞+前置詞」から成る句動詞の成立過程を明確に区別し、明らかにした研究は世界的に皆無に等しい。さらに動詞の語源及び動詞の音節数に基づいた新分類法は、比較言語学、英語学、コーパス言語学のみならず辞書編纂、句動詞辞典、句動詞指導等英語教育界にも影響を与え、学術的意義は高い。

研究成果の概要（英文）：This study examines phrasal verbs consisting of "verb + preposition," which are different in origin and development from "verb + adverbial particle." All phrasal verbs (verb + preposition) have been extracted from the Oxford PHRASAL VERBS Dictionary for learners of English 2006. This study also discusses the properties of phrasal verbs consisting of "verb + preposition," using the Oxford English Dictionary and proposes a new classification based on the origin of the verb (verbs of Germanic origin and verbs of French origin) and the number of syllables.

研究分野：英語学

キーワード：句動詞 古英語 中英語 ゲルマン語源動詞 フランス語源動詞 音節数 OED

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

句動詞(*phrasal verb*)の代表的な先行研究には Bolinger, D.(1971), Makkai, A.(1972), Quirk, R., et.al.(1972, 1985), 嶋田(1985『句動詞』)等がある。そして Oxford, Collins, Cambridge 等から句動詞(活用)辞典も数多く出版されている。しかしながら国内外を問わず、その多くは共時的なレベルでの研究であり、歴史的に句動詞を分類した先行研究や成立過程のメカニズムに焦点を合わせた研究は、Hiltunen, R.(1983)以降はあまり活発に行われていない。「動詞+副詞辞」から成る句動詞と「動詞+前置詞」から成る句動詞の成立過程を明確に区別し、明らかにした研究は世界的に皆無に等しい。

句動詞の通時的研究は比較言語学、英語学、コーパス言語学のみならず辞書編纂、句動詞辞典、句動詞指導等英語教育界にも多大な影響を与える分野である。

2. 研究の目的

史的コーパスを利用して、英語本来(ゲルマン語)の句動詞(古英語接頭辞付動詞から発達した句動詞)と古フランス語の影響をうけて形成された句動詞の成立過程に焦点を合わせた先行研究は主に「動詞+副詞辞」から成る句動詞の研究であり、神谷(2016,2017,2018)等の先行研究に集約される。しかし「動詞+副詞辞」から成る句動詞と「動詞+前置詞」から成る句動詞の発達過程の相違を明確に示す研究は皆無である。「動詞+前置詞」から成る句動詞の先行研究は共時的なレベルでの研究がほとんどである。

本研究では、「動詞+前置詞」から成る句動詞を通時的に、前置詞の発達過程及びフランス語法からの翻訳借用(なぞり)を踏まえ、中英語、古英語まで遡り、成立過程を探り、初出例を明示する。そして「動詞+前置詞」から成る句動詞の成立過程のメカニズムを探求し、動詞の語源・音節数に基づく新分類法を提示する。

3. 研究の方法

(1) 「動詞+前置詞」から成る句動詞の特徴：動詞の語源及び音節数からの分析

① Oxford *PHRASAL VERBS Dictionary for learners of English* (2006)から「動詞+前置詞」から成る句動詞をすべて(577語)抽出する。

② [新分類法] 動詞の語源(ゲルマン語源・フランス語源)、音節数別に用例を列挙する。

(あ)「ゲルマン語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞(例：*run into* ...に偶然出会う)

(い)「ゲルマン語源 2 音節動詞+前置詞」から成る句動詞(例：*answer for* ...の責任をとる)

(う)「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞(例：*bank on* ...に頼る)

(え)「フランス語源 2 音節動詞+前置詞」から成る句動詞(例：*account for* ...を占める)

(お)「フランス語源 3 音節動詞+前置詞」から成る句動詞(例：*surrender to* ...に負ける)等

③ (あ)～(お)等の割合を算出し、「動詞+前置詞」から成る句動詞の特徴を導き出す。

④ 「動詞+前置詞」から成る句動詞の初出例を OED 等の史的コーパスを用いて導き出す。そして初出例がフランス語法の翻訳借用(なぞり)であるのか分析する。さらにその意味が現代英語へどのように変化し比喩的意味に拡張しているのか、意味の変遷も調べる。

(2) 「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞

新たに発生した「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞の初出例を OED 等の史的コーパスを利用して導き出し、成立過程を探る。さらにその意味が比喩的意味に拡張しているのか調べる。

(3) 「フランス語源多音節動詞+前置詞」から成る句動詞

新たに発生した「フランス語源多音節動詞+前置詞」から成る句動詞の初出例を OED 等の史的コーパスを利用して導き出し、成立過程を探る。さらにその意味が比喩的意味に拡張しているのか調べる。

例： *surrender to* (...に負ける) の初出例 (OED)

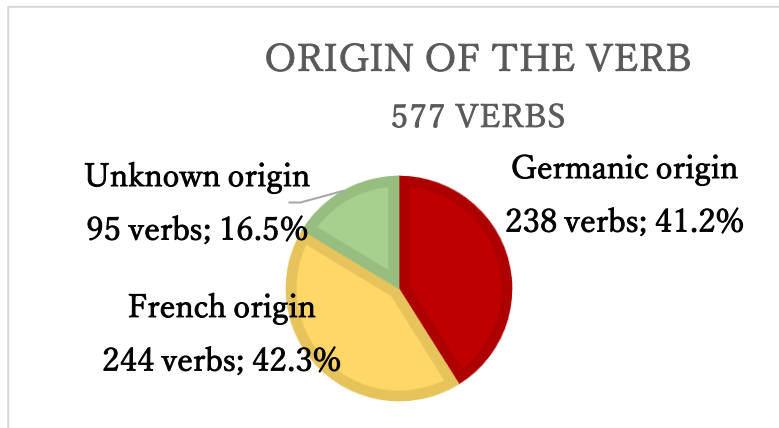
a1700 Evelyn *Diary* 26 May 1684, *Luxembergh was surrendered to the French.*

(4) 「フランス語源動詞+前置詞」が formal で使われている割合を導き出す。

4. 研究成果

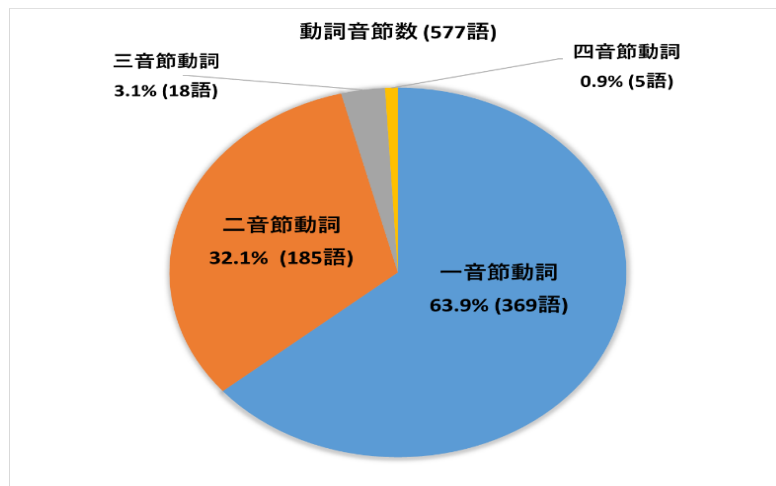
(1) 動詞の語源

「動詞+前置詞」から成る句動詞を形成する動詞の数は 577 語であり、ゲルマン語源動詞 238 語 (41.2%) とフランス語源動詞 (ラテン語源動詞含む) 244 語 (42.3%) の割合はほぼ同じである。「動詞+前置詞」から成る句動詞は古英語の接頭辞付動詞からの発達 (ex. *upgan* → *go up*)、またはフランス語源の多音節接頭辞付動詞を「英語本来語の単音節動詞+副詞辞」に置き換える過程とは直接結びつかないので、「動詞+副詞辞」から成る句動詞と比べて、フランス語源の動詞と結びつく割合が高くなると言える。(語源不詳の動詞は 95 語(16.5%))



(2) 「動詞+前置詞」から成る句動詞の音節数

動詞 (語源不詳 95 語含む) 577 語の音節数に関して、1 音節の動詞が 369 語 (語源不詳 80 語含む)、2 音節の動詞 185 語 (語源不詳 14 語含む)、3 音節の動詞 18 語 (語源不詳 1 語含む)、4 音節の動詞が 5 語であり、1 音節の動詞が全体の約 64% を占める。3 音節動詞 18 語の内 16 語が、4 音節動詞 5 語全てがフランス語源の動詞である。



(3) 動詞の語源及び音節数に基づく新分類法

語源別の音節数は以下の通りであり、ゲルマン語源動詞は圧倒的に1音節動詞(201語)が多い。フランス語源動詞は2音節動詞(135語)が多い。3音節、4音節から成る動詞は圧倒的にフランス語源動詞である。

ゲルマン語源動詞

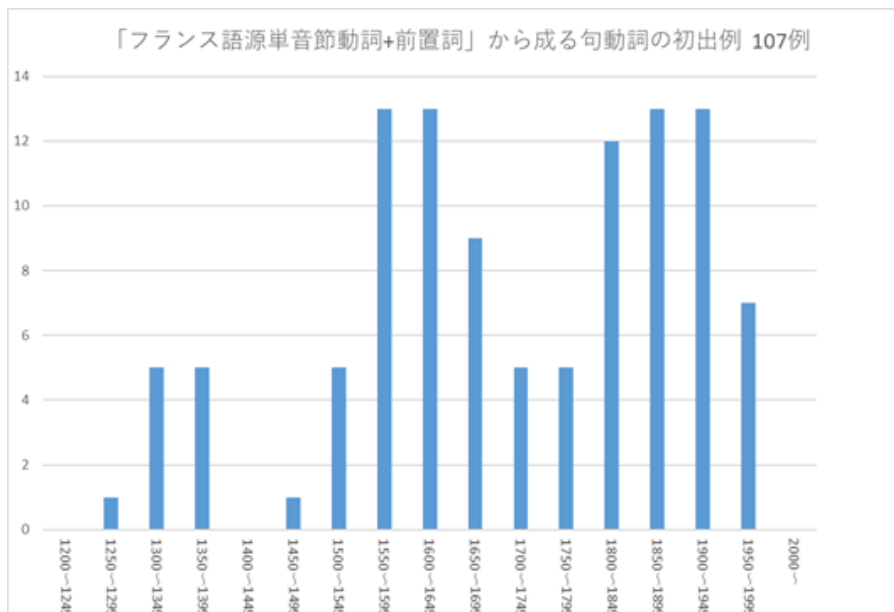
「ゲルマン語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	201 語
「ゲルマン語源 2 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	36 語
「ゲルマン語源 3 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	1 語
「ゲルマン語源 4 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	0 語
合計 238 語	

フランス語源動詞 (ラテン語源動詞含む)

「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	88 語
「フランス語源 2 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	135 語
「フランス語源 3 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	16 語
「フランス語源 4 音節動詞+前置詞」から成る句動詞	5 語
合計 244 語	

「動詞+前置詞」から成る句動詞では、前置詞が半イディオム、即ち「完了・強意」、「継続」等の比喩的意味に拡張することは「動詞+副詞辞」の副詞辞と比べて少ないと言える。その理由は、副詞辞は動詞を修飾するので、動作の「完了・強意」、「継続」の意味に拡張するが、前置詞は動詞ではなく、前置詞の後に来る(前置詞の)目的語に連動し、「点、起点、到達点、運動の向き」等を示し、前置詞本来の意味(語義通りの意味)を保持しているため、比喩的意味への拡張は制限される。

(4) OED に現れる「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞の年代別初出例数



近代英語(1500年～)以降に「動詞+前置詞」から成る句動詞が量産化された。

(5) フランス語法からのなぞり(calque)

以下の2例のみがフランス語法からのなぞりである。

- ① gain in sth to get more of a particular quality: The students are slowly gaining in confidence. gain in はフランス語 *gagner en* からのなぞり。

1841 Emerson *Compensation Wks.* (Bohn) I. 40 Our popular theology has gained in decorum and not in principle.

- ② gain on sb/sth (often used in the progressive tenses) to come closer to sb/sth, especially sb/sth that you are chasing: We were gaining on the car in front.

1719 De Foe *Crusoe* 19 Finding the Pirate gain'd upon us ·· we prepared to fight.
gain on (～に追いつく) はフランス語 *gagner sur* からのなぞり。

(6) formal になる「フランス語源動詞+前置詞」から成る句動詞

句動詞(特に「動詞+副詞辞」)は一般的(圧倒的)に口語的表現として日常会話で多用される。「フランス語源動詞+前置詞」で formal に使われる句動詞は以下の通りである。「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞では 7%が formal な用法になり、2 音節動詞、3 音節動詞になるとその割合は 31 %, 38%と高くなる。フランス語源多音節動詞はゲルマン語源 1 音節動詞、軽動詞(light verb)とは異なり、動詞自体に比較的詳しい意味(原義)・formal な意味が内包されているので、前置詞と結合しても、「ゲルマン語源動詞+前置詞」から成る句動詞に比べて口語的表現になり難い。また前置詞が語義通りの意味を保持しているので、「フランス語源多音節動詞+前置詞」で高度なイディオムに発達することは少ないと言える。

	formal
「フランス語源 1 音節動詞+前置詞」から成る句動詞 88 語	6 (7%)
「フランス語源 2 音節動詞+前置詞」から成る句動詞 135 語	42(31%)
「フランス語源 3 音節動詞+前置詞」から成る句動詞 16 語	6(38%)
「フランス語源 4 音節動詞+前置詞」から成る句動詞 5 語	1(20%)
合計 244 語	55(23%)

(7) 総統括:「動詞+前置詞」から成る句動詞の特徴

- ① 動詞の語源:ゲルマン語源動詞とフランス語源動詞の割合はほぼ同じである。
- ② 動詞の音節:ゲルマン語源動詞は 1 音節動詞が多いが、フランス語源動詞は 2 音節(以上)動詞が多い。
- ③ Informal or Formal: Formal な用例がフランス語源 2 音節動詞(以上)で多く散見される。
- ④ イディオム度:前置詞は語義通りの意味で用いられるので、半イディオム構文及びイディオム構文を形成する例は、「動詞+副詞辞」から成る句動詞と比べて少ない。

Free, nonidiomatic construction の用例:多い
Semi-idiomatic construction の用例:(極めて)少ない
Highly-idiomatic construction の用例:少ない

- ⑤ 「動詞+前置詞」から成る句動詞は近代英語(1500年～)以降に量産化された。

◆研究成果報告の詳細は以下の『研究成果報告書』を参照

「動詞+前置詞」から成る句動詞の成立過程に関する基礎的研究及び新分類法の提示
科学研究費補助金 基盤研究(C) 2019年度～2023年度『研究成果報告書』(研究代表者:神谷昌明)(234頁)2023年 (神谷昌明の researchmap (MISC)から入手(download)可)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 神谷 昌明	4. 巻 55
2. 論文標題 句動詞関連研究書誌・参考文献（文献目録）（1892年～2022年）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『豊田工業高等専門学校研究紀要』	6. 最初と最後の頁 27/111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20692/toyotakosenkiyo.55-5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masaaki KAMIYA	4. 巻 54
2. 論文標題 Phrasal Verbs Consisting of Polysyllabic Verb of French Origin + Preposition in the Oxford English Dictionary	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of National Institute of Technology, Toyota College	6. 最初と最後の頁 39-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20692/toyotakosenkiyo.54-7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masaaki KAMIYA, Satoshi NAKAGAWA	4. 巻 53
2. 論文標題 First Appearance of Phrasal Verbs Consisting of “Monosyllabic Verb of French Origin + Preposition” in the Oxford English Dictionary	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of National Institute of Technology, Toyota College	6. 最初と最後の頁 64-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20692/toyotakosenkiyo.53-10	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masaaki KAMIYA	4. 巻 52
2. 論文標題 Properties of Phrasal Verbs Consisting of “Verb + Preposition” Based on the Origin of the Verb and the Number of Syllables	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of National Institute of Technology, Toyota College	6. 最初と最後の頁 58-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20692/toyotakosenkiyo.52-10	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 神谷昌明
2. 発表標題 平成30年度国立高専機構教員顕彰（分野別優秀賞）ポスターセッション（ポスター発表）：ポスタータイトル「海外留学実績及び英語研究を通じた社会貢献」
3. 学会等名 令和元年度全国高専フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Welcome to Kamiya's Home Page https://sway.office.com/h2w2nCWJG8C0E26D?ref=Link
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高橋 薫 (TAKAHASHI Kaoru)		
研究協力者	中川 聡 (NAKAGAWA Satoshi)		
研究協力者	清水 裕貴 (SHIMIZU Hiroki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	遠藤 颯馬 (ENDO Soma)		
研究協力者	道本 祐子 (MICHIMOTO Yuko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関